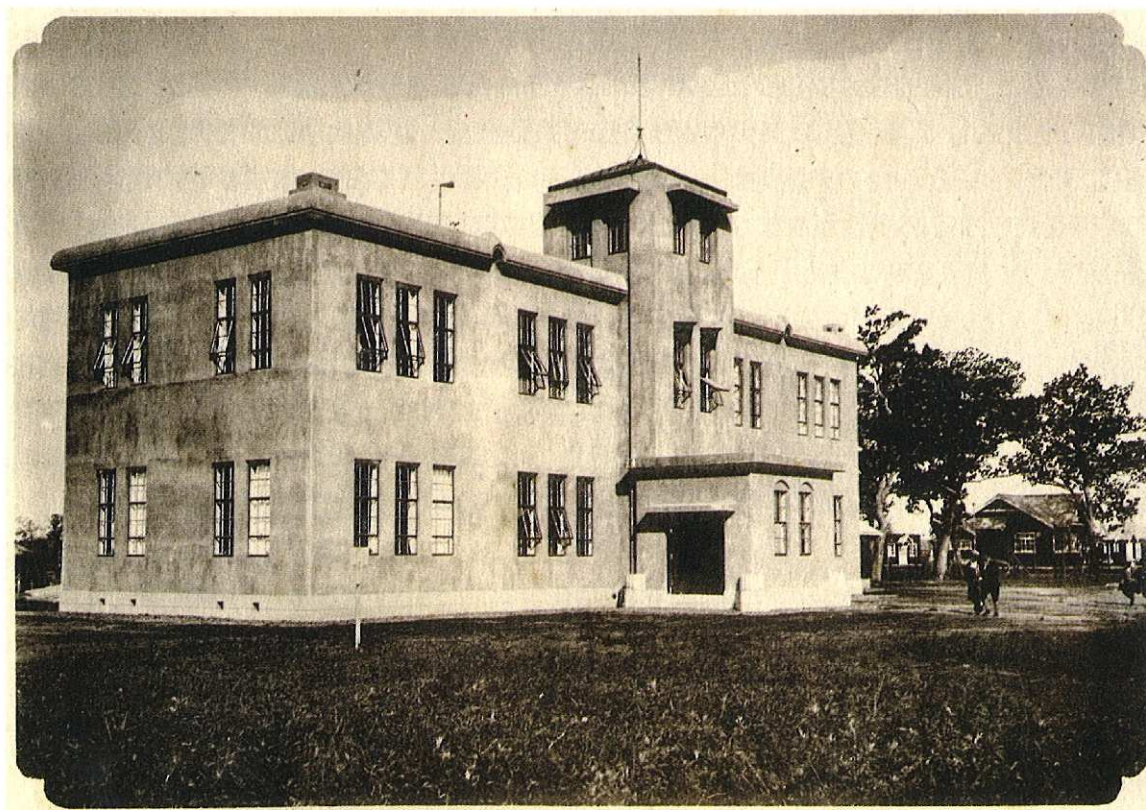


中標津町郷土館だより 第29号

# 90<sup>th</sup> Anniversary



旧北海道農事試験場根室支場

# 開設までの歩み

明治初期にはじまった北海道開拓の進展とともに、気象観測や農業経営などに関する実験調査、移住者への技術指導などを行う農事試作場が次々に各地で設置されていきました。

根釧地方においては、明治43年に野付郡平糸村春別に開設された根室農事試作場と厚岸郡太田村の釧路農事試作場が、最初の農事試作場です。

根室農事試作場では、開設にあたり別海村と標津村で誘致合戦が展開されました。当初は標津村に開設の計画があったものの、開設にあたり寄付金2千円が必要であり、その負担が大きいということで難色を示していました。そうした中で、別海村有志が根室実業倶楽部の協力により建設寄付金の方途を講じたため春別原野に開設されることになりました。

明治43年11月16日に開設された同試作場は、翌年3月15日農業技手小野寺徳之丞が場長として赴任し事業を開始しました。当初は設備が整わず開墾のみでしたが、開設2年後、農作物の試作に成功し、根室原野でも農業経営が可能であることが実証されました。

昭和2年になると、国家的な大プロジェクトの一つであった北海道第二期拓殖計画が樹立され、20年間で凡そ10億円を投入して、釧路川以東の根室支庁及び釧路支庁に至る大原野の拓殖計画が進められました。当時根室原野には30万haの未開地がそのままの形で放置されており、根釧原野の開発を進めるため試験研究機関を強化する必要性が高まり、新たな農事試験場の開設が計画されました。用地選定にあたっては、根室支庁がある根室町の方が、行政との連絡上都合がよいのではないかと案もありましたが、根釧原野開発の計画から、原野中央近くに選定すべきとの考えのもと標津村で現地調査が実施されました。この用地選定をめぐる武佐、開陽、中標津で誘致合戦が繰り広げられましたが、最終的に現在地である中標津市街地が選ばれました。なお、昭和はじめの中標津市街地の人口はわずか30戸程であったのに対して、標津市街地では180戸程。中標津は原野の中の小さな市街地のひとつでした。そうした背景のなかで中標津を選んだ理由を、後に初代場長松野傳氏は次のように述べています。



松野 傳 氏

「将来農村電化の問題も、当然考慮せねばならぬ時代は来ることを予想し、せめてこの不便な奥地に新たに近代的試験場を建てるからには、どうにか自家発電が出来る小川のほとりに位置を占め、小型のリアクション・タービンを取り付け場内に電化したい願望で、その点特に検査し武佐辺でも随分探したのであるが、遂に適地は見当たらず、全く誰もが予想していなかった、中標津二十四線の現支場の位置を、全く虚心坦懐な技術的良心をもって第一候補地と内定した」。

(『北海道農業の思い出』より一部改変)

その他にも、「試験場用地が比較的平坦」であり、「原野の中心」で「交通の要衝」であり、「高台で、全原野を一望」できる絶好なところ、高台の麓には水稻の試作も可能な小川があることなどを理由に挙げ、中標津市街地を選んだと著書『北海道農業の思い出』で述べています。

# 旧北海道農事試験場根室支場庁舎

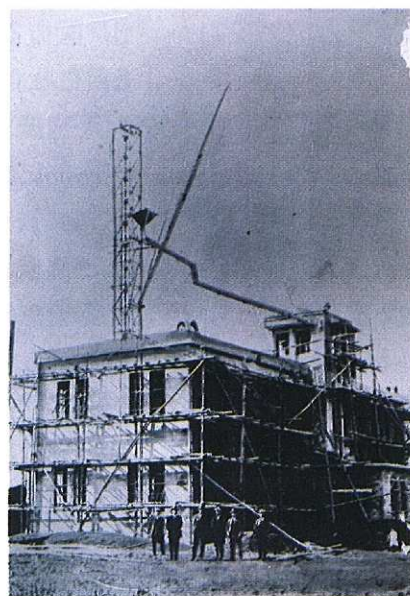
旧北海道農事試験場根室支場庁舎は昭和2年12月17日に完成した鉄筋コンクリート2階建塔屋付の建物です。

鉄筋コンクリートの建物は、道内では大正12年に竣工した北海道庁別館が最初です。昭和初期の鉄筋コンクリートの建物としては、釧路警察署など数件であり、当時としては非常に珍しい工法でした。そのため、根室原野の中でもあまり人が住んでいない中標津へ鉄筋コンクリートの建物を建てることに反対する意見もありました。しかし、初代場長松野氏は、原野の将来性を見据え「移住者に安心感を持たせる」ことを意図として鉄筋コンクリートを採用しました。また、内部の色調をマホガニーブラウンに統一するなど、近代感覚のあるものに仕上げたいという松野氏の考えが反映された設計となっています。その結果、「第2の帯広」との噂が流れ、中標津へ移り住み商いを開業する人たちが増え、中標津市街地が大きく形成されていきました。

庁舎一階には事務室・種芸実験室・農芸化学実験室などを設け、二階には支場長室・応接室・大講堂がありました。昭和32年に、屋根を陸屋根から勾配屋根へ改修し、同40年庁舎正面左側に実験室を増築、同43年、庁舎正面右側に図書室、会議室を増築しています。平成5年釧路沖地震後、外壁にサイディング材を施し、窓や屋根の改修・変更が実施されるなど改修が続きますが、現在もおおむね開設時の様子をとどめています。

平成15年に新庁舎が完成し、旧庁舎の取り壊しが予定されていましたが、町民有志の保存運動をきっかけに北海道から町への無償譲与が実現し、平成21年に付属施設の陳列館、種苗倉庫、農具庫とともに国の登録有形文化財に登録され、今年で築90周年を迎えました。

現在、NPO法人伝成館まちづくり協議会が町の委託を受け、保存管理を行っています。



昭和2年撮影 建設中の様子



昭和40年頃撮影  
北海道立根釧農業試験場時代

## 旧北海道農事試験場根室支場附属施設



昭和3年設置 陳列館  
現：中標津町郷土館  
緑ヶ丘分館



昭和3年設置 種苗倉庫



昭和3年設置 農具庫

# 沿 革

- 明治43年(1910) 野付郡平系村春別に根室農事試作場、厚岸郡太田村に釧路農事試作場が開設。
- 昭和 2年(1927) 6月国費で北海道農事試験場根室支場庁舎を建設。  
8月に松野傳氏が支場長に就任。
- 昭和 3年(1928) 北海道農事試験場根室支場附属施設である陳列館、種苗倉庫、農具庫などを建設。
- 昭和 4年(1929) 本格的に試験を開始。実習生の養成を開始。
- 昭和12年(1937) 水稻試験を中止。
- 昭和17年(1942) 北海道農業試験場根室支場と改称。
- 昭和25年(1950) 北海道立農業試験場根室支場と改称。
- 昭和28年(1953) 北海道立根室馬鈴しょ原種農場を併置。
- 昭和32年(1957) 庁舎の屋根を陸屋根から勾配屋根へ改修。
- 昭和39年(1964) 北海道立根釧農業試験場と改称。
- 昭和40年(1965) 庁舎正面左側に実験室を増築。
- 昭和43年(1968) 庁舎正面右側に図書室、会議室を増築。
- 平成 5年(1993) 釧路沖地震後、庁舎の外壁をサイディング材へ改装の他、窓や屋根の改修・変更を実施。
- 平成16年(2004) 新庁舎への移転(平成15年)にあたり、旧庁舎の取り壊しが予定されていたが、町民有志による保存運動をきっかけに北海道から町へ無償譲与が実現。NPO法人伝成館まちづくり協議会が、旧庁舎の保存管理を開始。
- 平成21年(2009) 旧庁舎及び附属施設(陳列館、種苗倉庫、農具庫)が国の登録有形文化財に登録。



でんせいかん  
伝成館(旧庁舎)



白樺並木

初代場長松野氏は、庁舎と周辺の自然との調和が保てるよう前庭をはじめ場内の木々の配置なども考えて設計しています。

庁舎に隣接する「白樺並木」も松野氏の考えによって植えられたものです。また、この道は、中央基線道路(零号)とも称され中標津町、標津町、別海町に広がる殖民区画の基点にもなっています。



昭和初期、旧庁舎屋上から西方向を望む

発行：平成29年12月30日  
発行所：中標津町教育委員会  
中標津町丸山2丁目22番地  
電話：教育委員会 (0153-73-3111)  
郷土館 (0153-72-2190)  
URL：  
[http://www.nakashibetsu.jp/kyoudokan\\_web/index.htm](http://www.nakashibetsu.jp/kyoudokan_web/index.htm)